

変形性股関節症 update

「変形性股関節症 update」と題して特集を組ませていただいた。

わが国の変形性股関節症には多くの特徴がある。例えば圧倒的に女性が多いこと、幼少時に發育性股関節形成不全（developmental dysplasia of the hip；DDH）の治療歴を有していることが少なくないこと、寛骨臼形成不全に起因する例が多いことなどである。また家族歴を有する例がまれではなく、遺伝的要因の関与も強く示唆されている。変形性股関節症に関連する大きな変化もあった。日本はかつて先天性股関節脱臼の多発国であったが、1970年代前半のDDH予防運動が成功し、その罹患数は約1/10に激減した。この年代に出生した方々が変形性股関節症の好発年齢である50代に達した現在、幼少時のDDH治療歴をもつ集団は減少していると推察される。一方、社会の高齢化によるためか変形性股関節症に対する人工股関節置換術の件数は年々増加傾向であり、2000年頃と比較すると倍増したといわれている。DDH予防運動の成功は寛骨臼形成不全が減少する要因となりうるが、人工股関節置換術の件数の増加は逆に変形性股関節症罹患患者数が増加している現況を示している。それらを背景に変形性股関節症の疫学がどうなっているのかは興味のあるところであり、飯高氏には住民健診の結果をベースに最新の疫学をご紹介いただき、山手氏にはDDH予防運動に絡めてライフコース疫学の視点から述べていただいた。倉員氏にはこれまでに明らかになっている変形性股関節症や寛骨臼形成不全に関連する遺伝的要因についてレビューしていただいた。

治療についても意見が分かれる点は少なくない。本特集では「変形性股関節症治療における controversy」と銘打って、3つの controversies、すなわち運動療法の効果検証、borderline dysplasia に対する矯正骨切り術と股関節鏡視下手術の成績、そして若年者の進行期変形性股関節症に対する手術的治療の選択についてそれぞれ鉄永氏、山口氏、藤元氏にご執筆いただいた。すべての稿において、造詣の深い先生方に最新の知見を解説いただいた力作である。本特集が読者の皆様にとって価値あるものとなり、明日からの日常診療の一助になることに期待する。

（中島康晴）